シリアのアラブ復興社会党(バアス)について

山　根　　学

はじめに
Ⅰ　その思想的背景
Ⅱ　バアスの歴史
　1　権力への道
　2　アラブ連合共和国とバアスのジレンマ
　3　バアス政権下のシリア—そのイデオロギーの修正—
　4　新バアス主義の誕生—むすびにかえて—

はじめに

中東においてアラブ社会主義として総称されるいわゆる社会主義への流れはきわめて多様であるとはいうものの，大きく分けると2つ存在しているといえる。1つはエジプトにおいてナセルによって展開されたものであり，もう1つは現在シリアとイラクで政権を握っているアラブ復興社会党，いわゆるバアス党の下で展開されているものである。ごく大まかに両者を特徴づけると，ナセルの方は社会主義的な目標をもたずに政権を握り，むしろその後エジプトの独立と経済発展という課題をかかげてその政権を維持・展開させていくうえで各局面においてやむをえず社会主義的政策を採用し，その過程で社会主義イデオロギーを模索していったいわゆるプラグマティクな社会主義であるのにたいして，バアスの方は設立の当初から他の政党とは区別される包括的で体系的な社会主義に関するイデオロギーを

もった政党として現われ，ナセルのそれとは逆に政権を担当する過程でそのイデオロギーを修正し，修正せざるをえなかった党として紹介することができよう。

この２つの社会主義の流れは，1958年から1961年までのエジプトとシリアの合併によるアラブ連合共和国の形成にみられるように相互に影響をうけ，また及ぼしたことが充分考えられるが，実をいうとそれを明確に証明することができない。私の研究テーマである「ナセルの社会主義」を検討するうえでバアスの社会主義のもつ意味は大変大きいと考えるものの，この点について明確でないため本稿ではむしろバアスの社会主義そのものを扱って，後の検討と批判の材料にすることにした。

I　その思想的背景

ところで1943年にＭ．アフラクとＳ．ビタールによってこの党（最初はアラブ復興党）が設立されるまでは，シリアでは統一した国民経済はもちろん，シリア民族意識も充分に生まれていなかったことにまず我々は注意しなければならない。それはこの地域では元来多くの人種と異なった宗教，宗派をもつ人々が独自の自治的生活圏を形成し，その上にオスマン・トルコの支配がのっかっていたこと，シリア，イラク，ヨルダン，レバノン，パレスチナ等の国境は1920年以降にイギリスやフランスによって人為的に引かれて夫々の国が生まれたことによろう。したがってこうして生まれたシリアではアラブ人が圧倒的であるとはいうものの，クルド人（8.5%），アルメニア人（４%），トルコメン（３%）を含み，更に宗教的に分類すると人口の60%がムスリムのスンニー，15%がキリスト教徒，11.5%がムスリムのアラウィー派，３%がムスリムのドルーズ派となって統一した民族国家を建設するにはきわめて困難な要素を含んでいた。のみならずフラン

スの支配はこうした人種的，宗教的分裂を一層促し，ドルーズにたいしては1922年と1939年の２回にわたって，またアラウィーにたいしては1920年と1936年に夫々独立を認め，トリポリ，シドンは一時レバノンへ，またアレクサンドレッタはトルコへ割譲して民族国家の建設を妨げている。

したがってこうした植民地支配と民族的分裂状態とはバアスの創設者に特殊な民族主義を主張させることになったといえよう。もちろんアフラクとビタールにとっては民族主義は「他のすべての前にある愛」[1]として無条件に承認されるものであった。たがかれらにとって民族とはアラブのことであり，そのアラブ世界は「言語，歴史と文化，共通の感情と熱情，経済，地理，自己防衛，利害社会」[2]を共通にする一つの国家としてうけとめられていた。いいかえばバアスによって唱えられた民族主義は，シリアの民族的分裂状態を背景としてシリア民族主義とはならず，アラブ民族主義になって，過去の偉大なアラブ帝国の復興（バアス）がかれらの夢となり，義務となったといえるであろう。したがって「現在の政治的分裂は人為的なもの」[3]にすぎず，アラブの復興のためには何よりもまずこの分裂したアラブ国家を統一させることが最も重大な課題とならざるをえなかった。なぜならかれらにとっては「『統一なしには現実の経済的，社会的進歩』は達成することができないことが明らかであった」[4]からである。したがって統一を重視したバアスのこうした性格はその組織にも反映され，党の最高機関は国民指導部といわれアラブ全域を統轄し，その下に地域指導部すなわちシリアやイラク指導部等が設置されるというような組織編成がなされてい

1　Michel Aflaq, Nationalism and Revolutoin, *Arab Nationalism–an anthology* –ed. Sylvia G. Haim. London, 1962, p, 242.
2　Ali yusif El-Khalil, *The Socialist Parties in Syria and Lebanon*, doctoral thesis, American University, 1962, p, 82.
3　*Ibid.*, p. 80.
4　Kamal S. Abu Jaber, *The Arab Ba'th Socialist Party–History, Ideology and Organization*, Syracuse, 1966, p. 102.

る。

ところでバアスによって唱えられたアラブの復興は決してイスラムの初期へのそれではなく，近代世界に適合する世俗的なものであったことにも注意しなければならないであろう。もちろんアラブ民族の生活に深く根づいているイスラムについては，バアスはその偉大な過去の遺産を決して無視するものではなく，むしろ「アラブ民族主義の実現にたいして道徳的，精神的刺激を与える[5]」ものとして尊重はしている。だが同時にバアスは将来の統一されたアラブ国家の中では宗教的，人種的差別は解消されるべきであるとし，「イスラム自身は新らしい時代の要求を満すように変化しなければならない[6]」ものと定めた。というのはこうして統一されたアラブの下では，アラブの人民は「外国の支配や統制，腐敗した支配者や封建的家族の影響，無知と迷信，貧困と病気」から解放されて自由にならねばならないからであり[7]，バアスにとって自由こそ統一の中身をなすものとしてとらえられていたからである。そしてこの自由は「アラブの人民が民主主義を通して見つけだす[8]」ものであり，人民こそ権力の主体であり，人民主権は民主主義的代表形態の政府の中に最良に表現されるものとなるからであった。したがってバアスの人民民主主義はその底辺で農村あるいは都市会議の代表を直接選出し，漸次その代表が国民レベルへと収斂されていくピラミッド組織が予定されていたといえよう。

しかしバアスのいうアラブ統一とその内容をなす自由は現状のままでは決して達成されうるものではなかった。アフラクは「アラブの民族主義の構造のギャップと欠点は現在の状況から暴力的に離れることによってのみ

5 Mohammad el-Attrache, *The Political Philosophy of Michel Aflaq and the Ba'th Party in Syria*, doctoral thesis, University of Oklahoma, 1973, p. 214.
6 Gordon H. Torrey, The Ba'th-Ideology and Practice-, *Middle East Journal*, Vol. 29, No. 4, 1969, p. 450.
7 Ali Yusif El-Khalil, *op. cit.*, p. 84.
8 *Ibid.*, p. 85.

橋わたしされる[9]」とのべているが，バアス党憲章第6条もこれを一層明瞭にして，「党は革命的立場に立つ。アラブ民族主義の復興の実現と社会主義建設という主要な目標は，革命と闘争なしには達成されないことを信じる。党は漸進的改革への依存や部分的，表面的な改良への満足が目的達成をおびやかし，失敗に導くものであることを信じる[10]」と規定している。したがって我々はバアスのイデオロギーの中に社会主義が最初から確固とした位置を占めていることを指摘することができるが，ここで注意しておかなければならないことはバアスによって掲げられた社会主義がマルクス主義のいう社会主義とは若干異なったものとなっているということであろう。それはこの社会主義における精神面の強調であるといってもよい。もちろんバアスは労働の搾取の禁止（憲章28条），公共事業，大規模工業の国有化（29条），土地改革（30条），労働者の諸権利の保証（40条）と経営への参加（32条）等々を規定してはいる。だが問題は「アラブ人民の可能性を実現させるための模範的な制度」（4条）であるこの社会主義には精神が存在し，「革命はこの精神に結びつけられればならない[11]」としていることであろう。もっともこの精神については明瞭な規定はなく，要するにそれはバアスの設立者の過去の経験—たとえばシリア独立の約束をほごしたフランスのレオン・ブルム人民戦線内閣，アルジェリア独立にたいするフランス共産党の態度，イスラエルにたいするソビエト，アラブ共産党の承認等々にたいする批判—からくる共産主義者のもつ物質主義や国際主義にたいするアラブ民族主義の主張が精神面での強調となって現われてきたものとみてよい。だが他面こうした指向はバアスの階級闘争の把握を特異なものにしていることを見落してはならない。つまりそれはかれらの社会主義が

9　Gordon H. Torrey, *op. cit.*, p. 452.
10　Constitution of Arab Ba'th Socialist Party, *The Arab Ba'th Socialist Party*, ed. K. S. A. Jaber, p. 169.
11　Mohammad el-Attrache, *op. cit.*, p. 159.

「社会における一層道徳的で正当な秩序を求める要求にたいして答を与えるという国民大衆の信念から生じる[12]」ものであるということが強調されるあまり，その社会主義は「暴力や流血や階級的にくしみなしに達成される[13]」ものとなって，「存在すべき唯一の階級闘争はアラブの国民とかれらを抑圧する人々との間[14]」に限られることになっているということである。アラブ統一を基準にして敵と味方を分類するこうした階級闘争の把握は，後バアス政府の内務大臣アタシをして「アラブ社会主義の主張は共産主義の教義の国際化にたいする感情的な反撥にすぎず，またバアスの教義のあいまいさを強めたにすぎない[15]」と批判せしめた根拠をなすものであったといえよう。

いずれにせよ主としてアフラクによって練りあげられたバアスの性格—アラブの統一，自由および社会主義の達成をめざす民族的，人民的，革命的運動—はこうして規定されたが，なおここで若干の問題にふれておかなければならないであろう。その1つはかれらの目標—アラブ統一，自由，社会主義—は決して並例的に掲げられたのではなかったことである。つまりバアスにとって統一はあくまでの第1の目標であり，社会主義は独立，すなわちアラブの統一が達成されるや否や展開されるであろう民族運動の2次的な役割に従属させられていた。それはすでにのべたように1つの国（アラブ）が分裂しているかぎり，自由の闘争も社会主義の闘争も決して成功しえないということを最大の理由とするものであったが，いずれにせよ統一へのこうした強調は当初アラブの民族感情にきわめてマッチしたものとしてバアスをアラブできわめて影響力のある政党にせしめたが，しかし後にみるように各国において夫々の民族主義が成長するとやがてそれと

12 Ali Yusif El-Khalil, *op. cit.*, p. 181.
13 *Ibid.*, p. 181.
14 Mohammad el-Attrache, *op cit.*, p. 371.
15 Kamal S. Abu Jaber, *op. cit.*, p. 99.

対立し，党そのものの性格転換をせまる要因となっていったことに注意しなければならない。

もう1つはバアスと大衆の間に密接な結びつきが欠けていたことである。それはシリアの文盲率が50～60%であることを前提としてバアスが自らの役割を，統一という遠大な目標の達成に努力するミッションとして規定していたことに起因するものであったが，それはやがてバアス党員をこの高尚な使命を認識したエリートとして位置づけるようになってしまったということである。たとえばアラブの人々がこの認識に達するまで「かれらはより高い状態に達した啓蒙された人によって指導されねばならない」[16]とか，「国家の偉大さはそれがもっている魂の数ではなく，それが創りだした天才と指導者の数によって計られうる」[17]とかいった主張は，そのイデオロギーの純粋性を維持するためのものと一応理由づけされてはいるが，明らかにそれは衆愚主義に走り，バアスの運動が大衆的な基盤を失なうことを暗示させるものであったことを見落すべきではないであろう。この意味でそれは本来社会主義とは何の関係もないものであったということができる。事実最大のメンバーを誇ったシリアでも支持者の数はともかく，メンバーは8,000人しかいなかったといわれ，実際政権を握った後党はたえず大衆との遊離に苦しめられることになった。

ところでこのエリート意識にはもう一つ重大な問題がひそんでいたことを忘れてはならない。それは真のバーシストは彼自身および彼の社会における望ましくない要素を革新する者であり，もしこの内部の心理的変化が達成されないならば，社会における何の現実的な革命も実施されないということが強調されていることであろう。つまりアラブ大衆の精神的革命がバアスの基調にすえられているといってもよい。アフラクは「我々はすべて

16 Gordon H. Torrey, *op. cit.*, p. 454.
17 Kamal S. Abu Jaber. *op cit.*, p. 15.

のアラブ人に彼自身が彼自身の救済の唯一の道であることを理解するように望む[18]」とのべているが，このアラブ大衆の精神的革命を遂行するうえで，バアスは自らをミッションとして規定し，メンバーの増加によるレベルの低下を嫌ったといえよう。また先にのべた社会主義における精神面の強化もこのかかわりでもう一度把握されねばならないことはいうまでもない。そしてそれは同時にバアスをして現実にたいして柔軟な対応を示す政党としてよりはむしろ，政治的啓蒙運動としてその性格を規定することとなり，その行動領域をきわめて狭隘なものにすることになったといえよう。

それではこうした性格をもつバアスはどのようにして政権を握ることができたのであろうか。

II バアスの歴史

1. 権力への道

シリアからフランス軍が撤兵し，この国に民族自決の条件がととのったのは1946年であった。もちろん当時はすでにのべたようなフランスの統治政策の下にこの国は分断され，「ダマスカス当局が初めて軍事的優勢を達成することができた」のはドルーズの反乱を粉砕した1954年であって，それもきわめて不充分なものでしなかった。[19]したがって独立当初国会の7割以上を占めたシリア国民党や独立諸派からなるシリアのほとんどの政治家は，概して地方の地主や商人の利害を代表し，したがってシリアの独立をもって満足した保守派でしかなく，国民大衆の利害をいくらかでも反映させようとしたバアスのような政党の存在はほとんど全く無名でしかなかった。だが1948年のパレスチナ戦争における敗北はアラブ全体をゆり動かし，

18 *Ibid.*, p. 132.
19 Moshe Ma'oz, Attempts and Creating a Political Community in Modern Syria, *Middle East Journal*, Vol. 26, No. 4, 1972, p. 399.

旧い政治指導者にたいするアラブ人民の怒りを爆発させた。シリアではそれはまず旧政治家によってこの敗戦の責任をとらされようとした軍の一連のクーデターとなって現われたといえよう。たとえば1949年の3月にはH. ザイムのクーデターがおこって議会は解散され，軍事独裁が敷かれたが，同年8月には S. ヒンナウィがクーデターをおこし，彼の下で形成されたH. アタシ内閣の下でアフラクは国民教育相になり，更にバアスから3人が議員に選出された。バアスがシリア国民に知られるようになったのはこの49年からであるといわれている。しかしすぐ12月にはシシャクリのクーデターがおこり，再び軍事独裁が敷かれ，彼の下で51年までに9つもの内閣が形成されたが，以降54年までは政党はすべて解散され，すべての政治活動は禁止されてしまった。

しかしこの期間はバアスにとっては雌伏の期間であったといえよう。まず非合法ながらシシャクリ打倒のために他の諸政党との間で統一戦線が形成され，その影響力を拡大できたからである。これは後に人民党や国民党との間で国民戦線という具体的な形をとったが，とりわけバアスにとって重要であったのは中部シリアの中心都市ハマを中心に強力な政治力をもっていた A. ホウラーニのアラブ社会党との合併であったといえよう。1954年のこの合併によってバアスはアラブ復興社会党となったが，それは単に党が量的に拡大したことを意味しただけでなく，性格的にも大きく変化したことを意味していたことを見落してはならない。それは新たに参加したホウラーニ自身が1943年以来国会議員であったことから明らかなように根っからの政治家であり，イデオロギー先行の傾向があったこれまでのバアス党に現実の政治活動上の指導者を与えたという点で党の影響力を飛躍的に拡大できたこと，加えてホウラーニの支持勢力は農民，軍人，青年であったことからこれまでバアスに欠けていた大衆基盤の手がかりができたことを意味していた。こうしてバアスは旧政治家に代表される地域的，部族

的，家族的利害を捨てさり，新らしい世代の利害と理想を代表する政党としてシリアの政治舞台に登場することになった。

更にバアスがその勢力を拡大していった要因をもう2つ掲げておこう。1つはこの期間におけるシリアの経済的混乱である。パレスチナの敗戦につづくシリアの政状不安はそもそも第2次大戦以後の大衆の経済生活の困窮化の表現であったが，当時シリアでは失業は増大し，物内は5倍にも騰貴していた。そしてこうした大衆の不満がバアスに吸収されていったといえよう。57年当時バアスはシリアにある123の労働組合中53組合の支持をえるようになっている。

もう1つはシリアをめぐる国際環境である。そもそもパレスチナの敗戦以降アラブの復興はアラブの人々にとって不可欠で緊急の課題となっていたが，更に53年からは西側列強によるソビエト封じ込めのためのバクダード条約が中東で提案され，シリアと国境を接するトルコとイラクがこの条約に参加するとともに，トルコ側からしばしば軍事的挑発がなされてシリアに大きな圧力がかけられていたこと，そしてシリア内部でもシシャクリや人民党がこの条約に深い関心をよせるようになっていたことである。したがってたえざる帝国主義の圧力の下にあってこの条約の中に新たな植民地支配を敏感に感じとるようになっていたシリア国民は，当時すでに積極的中立政策をかかげていたバアスの方へ吹きよせられていった。事実こうしたシリア国民の危惧は1956年のスエズ戦争となって同じアラブの同朋が住むエジプトへのイギリス，フランス，イスラエルの侵入となって現実化している。したがって1954年にシシャクリが追放されるとバアスはその後行なわれた選挙で17議席を獲保し，また55年，56年に設立された連立内閣でもビタールとハッラスは外務大臣と国務大臣に，またホウラーニはシリア議会の議長に任命され，多数の覇の支持をえるようになった。A. ジャバルは「1957年の末までにバアス党はシリアで確立されたように思え

る」[20]とのべている。のみならずアラブという大局からその復興を唱えたバアスの影響はシリア1国に限られることなく急速に勢力を拡大し，ヨルダン，イラク，レバノン，リビア，クエートで受け入れられて支部が形成されるようになった。特にヨルダンではバアスの指導者リマーウィは54年の左翼政府の中で外務大臣に任命され，また A. ヌワルはヨルダン軍指令官になるほどバアスは有名になっていた。

ところで我々はこうしたバアスの勢力拡大の背後に同時に2つの問題が含まれていたことを見落してはならない。その1つはバアスの勢力の拡大と共にシリア共産党の力が増大したこと，もう1つはエジプトとの連合がシリアの政治的潮流になってきたことである。前者については次のことが指摘されよう。1954年から合法化された共産党は作家や学生の組織，および労働組合に浸透することによって次第に力をえ，とりわけバクダード条約にたいする国民の反撥の中で1957年までに「中東で最大の，そしてもっとも良く組織された共産党」として「シリアにおける指導的な政治勢力の一つ」[21]になっていた。そしてこの共産党の勢力拡大は当初保守政党の排除においてこれと協力していたバアスをして危惧を懐かしめたといえよう。党設立の当初から共産主義を嫌悪していたバアスにとって共産党はどうしても排除しなければならものであったが，今やバアスは独自では遂行しえなくなったこの課題を当時共産党を圧迫していたナセルのエジプトと連合することによってナセルにそれを肩がわりさせようとした。バアスにとってエジプトとの連合へ進む直接のきっかけは以上のとおりであるが，しかしそれにもましてバアスにとって統一は最も重要な課題であったことを見落すべきではないであろう。当時ナセルは反バクダード条約のキャンペーンにおいて指導性をとり，スエズ戦争における勝利によってアラブ世界で確

20　Kamal S. Abu Jaber, *op. cit.*, p. 44.
21　Walter Z. Laqueur, Syria : Nationalism and Communsim, *The Middle East Transition*, ed. W. Z. Laqueur, London, 1958, p. 329.

固とした指導者の地位を築くとともに，内政においては「民主主義的，協同組合的，社会主義」，「イスラム社会主義」を唱えて社会主義を模索しはじめていた。したがってこの進歩的なエジプトとの統合はバアスにとっては将来のアラブ世界の統一への第一歩として，また「『アラブ革命』のための保証であり，偉大な前進」[22]として歓迎すべきものであったといえよう。こうしてバアスによって掲げられたエジプトとの統合はシリア国民のみならずアラブ大衆の圧倒的支持となって高まり，1958年12月にはアラブ連合共和国が建設された。

2. アラブ連合共和国とバアスのジレンマ

ところでこのアラブ連合共和国 (UAR) の中でバアスはいかなる地位を占めたであろうか。かれらは新らしい国家の内閣において4人の大臣をもち，4人の副大統領の1人も党の代表者をもって占めることができた。だが一見このバアスのイデオロギーの勝利ともみえる UAR の建設は，その背後にかれらのイデオロギーにたいする重大な挑戦がかくされていたことを見落してはならない。奇妙なことにバアスはアラブの統一をかかげてはいたがその具体的な計画をもっていなかった。したがって UAR の建設の背後にはナセルが統合にさいしてバアスを含むすべての政党を解体し，かわってエジプトと同じような国民連合組織を導入することを条件としていたこと，バアスにとっては致命的なこの条件が党内で充分検討されずにむしろその内部では統合後自らのイデオロギーをもって国民連合はもちろんナセルさえも指導できるというある種の期待が支配し，うやむやのうちに統合が実現されていたという事実がかくされていた。だがバアスの期待は国民連合の選挙において9,445議席のうちたった250議席をえたにすぎなかったことによって裏切られた。のみならずナセルが信頼した軍の情報長官 H. サッラジはこの国を警察国家に変え，とりわけバアス党員の自由を制

22 Kamal S. Abu Jaber, *op. cit.*, p. 45.

限した。たとえばバアス系の新聞 al-Jamahir は政府の政策を非難したため閉鎖された。また軍の内部においてもバアス党員は注意深くカイロへ追放され，その支配基盤からひきはなされた。後この追放されたグループからアサド等のようなシリア民族意識の強い政治家が生まれてくるが，いずれにせよこの統合はバアスにとってはアラブの統一への第一歩では決してなく，シリアのエジプト化でしかなかったことに注意しなければならない。のみならずこの過程でバアスによってこれまで抑えられてきた保守党が息を吹きかえしバアスの足をひっぱった。それは統合と同時に行なわれた土地改革にたいする地主の反撥や1961年の社会主義法令（もしこれが実施されればシリアの産業，工業の82%が国有化されることを意味した）にたいする実業界の反撥に助けられたものであったといえよう。もっともバアスにとってもナセルの独裁下におけるこのような法令は民間の手から官僚の手中へ資本が移動するだけの，つまり官僚主義の強化としてしか受けとめられていなかった。更にシリア大衆の統合への支持も急激にうすれていったことを見落してはならない。確かに大衆にとっては統合は栄光に輝いた過去のアラブへの復興の第一歩であったかもしれない。だがそれはやはり現実を無視した夢のようなものでしかなかった。統合の熱意は急速に高まったが，現実—たとえばエジプト人の尊大な態度—につきあたれば急速に冷えてしまった。

こうしてバアス主義者は1959年の末には中央およびシリア地方政府から全面的に辞任してしまったし，またシリア全体としては1961年9月に保守党の指導の下で軍がクーデターをおこし，アラブ連合共和国から脱退してしまった。そしてビタールとホウラーニはこの分離を積極的に支持さえした。もちろん分離後に形成されたシリア議会は人民党やムスリム同朋団を中心とする「この国の大実業家や封建地主によって支持され[23]」たものとな

23 Ali Yusif El-Khalil, *op. cit.*, p. 233.

り，バアス議員は172名中たった30名しか代表されていない。そしてこの保守政権は当然のことながら翌年1月にはダワリビ首相の下で「現在の形態のような全面的，部分的国有化については廃止することに賛成する」[24]と宣言して，ナセルの社会主義法令を撤回し，土地改革に修正を加えた。

こうしたアラブ連合共和国の分裂と，それにたいするバアスの指導者の支持，そしてその後形成された保守政権が採用した反動的な諸政策はアラブ全体に大きな失望をもたらしたが，とりわけそれはバアスにとって重大な危機をひきおこさざるをえなかったことは明らかであろう。もちろんそれはバアスのイデオロギーを主導した統一をどのようにとらえなおすのかということであったが，バアスがそうした理論的分析に進む前に，何よりもまずヨルダンとイラクの支部から UAR の分裂にたいする批判が加えられることになった。当時両支部を支配していたのはA. リマーウィと F. リカービーであったが，問題はかれらがバアス党員であると同時に強力なナセル支持者でもあったため，すでに早くから党を解散し，ナセルの国民連合に積極的に参加すべきことを主張していたことであろう。もちろんそれはアフラクに受け入れられるところではなく，そのためリマーウィはすでに1960年に新たに革命的アラブ復興社会党を設立してバアス党から追放されていた。したがっていずれにせよこうした分裂は UAR 設立当初からすでに予想されたものであったといえるが，しかし現実としてはイラクとヨルダンにおけるバアスの指導者の党からの追放は両者が夫々の国で大衆の支持を集めていたが故に党にとっては大きな損失とならざるをえなかった。こうしてバアスはまず党内の親ナセル派＝無条件統一派を切り捨てたが，同時に又反ナセル派＝統一無条件反対派もそのイデオロギーの一貫性を守るために切り捨てざるをえなかった。たとえばシリア内ではホウラーニー派（ビタールは分離賛成をすぐ自己批判した）が追放され，その後ホウ

24 *Ibid.*, p. 234.

ラーニに同調するレバノン支部のメンバーが追放された。したがって当時出された党指導部の声明はナセルの警察国家を批判するとともに，シリアにおける分離主義的潮流を攻撃するといったきわめてあいまいな性格をもつものとなって現われていたといえよう。バアスのイデオロギーが現実の中で再検討されるのは1963年3月のクーデターによってバアスがシリアの政権を担当するようになってからである。

3．バアス政権下のシリア—そのイデオロギーの修正—

1963年2月イラクにおいて親ナセル派の軍人 S. アレフとの協力の下でバアスは，1958年以来独裁を敷いていたカセム政権を打倒し，自らの政権を樹立したが，その丁度1ヶ月後の3月にシリアでもバアスによるクーデターが行なわれ保守政権はひっくり返された。もっともこのクーデターは正確には親ナセル派の軍人との連繋の下に行なわれたものであり，直接にクーデターに参加したバアスの軍人はわずかであったこと，そしてまたこのバアスの軍人も UAR 時代にカイロに追放されたシリアの軍人のうちアラウィが密かにつくった軍事委員会に属して，党の主流から離れた存在であったことに注意しなければならない。しかしいずれにしろバアスはこうした中で3～4ヶ月後には政権を握ることになるが，この過程はバアスのイデオロギーが民族問題を中心に次のように大きな修正をうける過程であったといえよう。

ところですでに50年代からバアスの内部では設立当初のメンバーとその後のメンバーの間で分裂がみられたといわれている。この分裂が当初からそのイデオロギーにかかわるものであったかどうかはともかく，それはURA政府からバアスが辞職した後に開かれた1959年と1960年の第3回，第4回党大会において次第に明瞭な形をとるようになり，とくに第4回大会ではこれまでの党の行動が統一という原則におかれてきたことに反省が加えられ，「現在の局面では(アラブ)民族主義的大義を強調することはそれ

ほど必要ではない。むしろ党がその中で活動する情況を科学的に分析するための道具はマルクス主義から借用すべきである」[25]という意見が現われ，マルクス主義が承認されはじめるとともにアラブ民族主義ではなくてシリア民族主義が強調されるようになっていた。

もちろんバアスは63年に政権を握ると再び党の原則であるアラブの統一をかかげて，バアス政権下にあったイラクとはもちろん，ナセルのエジプトとも再び統合することを呼びかけてはいる。だが結局この統合が失敗に終ったのはナセルとの協議の過程でこのシリア民族主義が党のイデオロギーを支配することになっていったことを示すものであったといえよう。当時ナセルはアラブ連合に失敗したとはいえ，なお国内では社会主義路線を着々と進めつつあり，スエズ戦争で確立したアラブの指導者としての地位はほとんどそこなわれていなかった。彼はアラブ各国で多大の支持者をもち，バアスを追放された先のリマーウィはもちろん，イラクの大統領であったアレフをはじめとし，シリア国内でも民間人，軍人をとわず多数の支持者をもっていた。特にバアスが支持を求めた労働組合では一応国家によって統制されてはいるものの，その指導者の多くはバアスに同調せず，ナセルに指導権をみているという有様であったといわれている。したがってバアスがクーデター後エジプトとの統合を再びかかげたのはその政権をナセルに承認してもらうという下心があったことを見落してはならないが，同時にバアスにとっては過去のナセルの独裁的国家の再現はどうしてもさけねばならなかったことも忘れてはならない。そのため今回バアスは集団的指導権，連邦制，各国におけるかなりの自治の確保をその条件としてあげたが，他方ナセルは自らの指導権にたいする絶大なる自信にもとづいて単独の指導権をゆずらなかった。しかしナセルとしては，何よりも過去におい

25 Itamar Rabinovich, *Syria under the Ba'th–A Study of Syrian Political History March 1963～March 1966–*, doctoral thesis, University of California, 1971, p. 45.

て自ら連合を分裂させていったバアスにたいする不信を捨て切れず，むしろシリアにおける親ナセル政権の樹立の方を好んだといえよう。事実クーデター直後から親ナセル派のデモンストレーションがシリアでつづいたし，バアスの方も親ナセル派の追放を一貫して行なった。そして7月に親ナセル派のクーデターが失敗するや，バアスはこれを利用して国内の親ナセル派を徹底的に追放し，ナセルのシリアへの期待をたち切ったが，同時に又統一へのきっかけも放棄せざるをえなかったといえよう。以上のようにバアスの政権下で再び提起された統一への動きはその理論的検討も充分なされぬまま，ナセルとの対立という現実の中で破算してしまった。それはバアスの理想がシリア民族主義という現実にひきもどされる過程を示したものということができるであろう。

同じようにバアスの唱えた第2の原則・自由もまた現実へひきもどされた。もちろんそのきっかけは先にのべたような親ナセル派の動きを抑圧するためのものであったが，バアスはその後政権を握ってからも，一応演説，出版，集会，抗議の自由を保証はしたが，デモンストレーションを禁止し，16もの対立する新聞の発行を禁止している。また労働者にストライキの権利を与えたが，それとても国家の利益の限界内でという制限をつけて実質的にはそれを禁止した。のみならず後にはバアスのみが唯一の合法的な政権であるとして，他の諸政党を強制的に解体している。それは政権を握った党が自ら信じる政策を展開していくうえで不可欠で，そしてきわめて現実的な措置であったかもしれないが，いずれにせよ党のかかげた理想から逸脱するものであったことは明白であろう。

ところで社会主義については上記の2原則とは全く異なり，統一への単なる「手段」としての位置づけから党の第1の目標にかえられ，その充実化がはかられていることを指摘せねばならない。だがそれも又バアスがシリアで政権を握り，それを維持していくうえで必然的に生じたものである

ことを見落してはならないであろう。クーデター後バアスは以前の保守政権によって制限されていた土地改革を再開し，58年法で80ヘクタールに定められた土地所有最高限度を更に15～50ヘクタールにまで引下げ，1969年までに計151万3,564ヘクタールを地主から徴発し，更にこのうち150万ヘクタールを事実上無償で小農や土地なし農民に払い下げた。[26] こうした土地改革は全耕地の50%が100ヘクタール以上の個人の所有の下にあり，農村人口の約82%が土地をもたず，[27] 封建的な地主・小作関係が一般に普及し，賦役制度すら根づよく残っているといわれたシリアにおいては国民の生活水準を向上させるうえできわめて重要な措置であったといえよう。同時にバアスは集団農場体制を確立するために協同組合を奨励し，1970年までに10万3,000名以上のメンバーをもつ1,631の組合を設立している。[28]

また国有化に関しては，61年の社会主義法令を復活させ，とりあえず一時国有化を解かれていた銀行，保険会社，大工場を再び国有化するとともに，更に6つの商業会社を全面的に，15の会社を25%国有化した。こうした国有化措置は64年，65年とつづくが，特に65年1月の法令では155もの企業が国有化され，[29] その範囲も外国貿易会社，外国人所有石油会社を含むあらゆる産業にわたるようになっている。こうして3億4,500万ポンドの財産，つまり工業に投下された総資本の約64%もが国有化された。[30] もちろん実業界の反撥もはげしく，ダマスカス商業会議所の経済相にたいする銀行国有化解除嘆願書をはじめとして各都市で商人達の抗議やサボタージュがつづいたが，これにたいしてバアスはこうした運動の指導者を投獄し，

26 Mohammad el-Attrache, *op. cit.*, pp. 253-255.
27 Zaid Keilany, Socialism and Economic Change in Syria, *Middle East Studies*, Vol. 9, No. 1, 1973, p. 63.
28 Mohammad el-Attrache, *op. cit.*, p. 257.
29 Eugene M. Fisher & M. Cheif Bassiouni, *Storm over the Arab World-A People in Revolution-*, Chicago, 1972. pp. 113-114.
30 Zaid Keilany. *op. cit.*, p. 66.

商店を没収し，更には軍が暴徒に発砲するといった強行手段でのぞんだ。もっとも労働者と政府とバアスによって運営されることになっていた国有会社の経営は熟練技術者の不足によって失敗し，いくつかの企業はその後国有化を解かれたり，資本の49%までの返還を条件として旧所有者の呼びもどし等が行なわれたが，いずれにせよ上記の国有化や土地改革は党としてではなく，政権としてのバアスにとって避けることができない課題であったことを見落してはならない。

さてこうした現実上の政策転換はイデオロギーにおける整理・修正を必要とせざるをえなかった。この点バアス政権が安定した1963年10月に開かれた第6回バアス党大会の内容はきわめて示唆的であったといえよう。決議そのものは党がこれで社会主義革命の達成に努力してきたことを前置にして，党の組織改革，シリアとイラクでの社会主義計画の問題，アラブ世界における闘争の当面の問題を扱ったごく簡単なものにすぎないが，それでもアラブ統一の問題はほとんど取り上げられず，中心問題は明らかに社会主義に移され，これまで党の憲章で「アラブ人民」としてしか規定されなかった革命の主体が明確にされて，「労働者，農民，革命的市民，軍のインテリゲンチャ，小ブルジョアジーがその最初の段階における社会主義革命の達成のための適切な勢力である[31]」ことが規定された。しかしとりわけ我々が注意しなければならないのはこの大会のために準備された『イデオロギー・レポート』であろう。それは党のマルクス主義者によって作成されたといわれるが，そこでは「伝統的な『アラブ社会主義』概念は狭隘な民族主義的態度を意味するものとして否定され」，党の基本的な原則は「社会主義へのアラブの道」に置換えられ[32]，人民民主主義や階級闘争の概念が再検討されるとともに，民族ブルジョアジーとその同盟者は倒されねば

31 Decisions of the Sixth Notional Convention of the Arab Ba'th Socialist Party, *The Arab Ba'th Socialist Party*, ed. K. S. A. Jaber, p. 161.

32 Itamar Rabinovich, *op. cit.*, p. 152.

ならず，小ブルジョアジーも適宜経済の主部や支部の国有化を通して形成される社会主義セクターに結合されねばならないとされてその後の国有化や土地改革への方針が示された。[33] もちろんその際即時社会主義改革を実施すべきだとする「極左」の主張は「デリケートな移行局面では適切な手段を採用する必要」[34]があるという大勢に押えられたけれども，いずれにせよ第6回大会は「マルクス・レーニン主義の原則や用語の重要の要素がバアスの思想の内に統合され，それに一層急進的な社会主義の概念が結合された」[35] 大会として重要なイデオロギー的転換点をなしていたといえよう。

4. 新バアス主義の誕生—むすびにかえて—

しかし第6回大会での決議はそのまま党の旧指導者の入れかえとなったわけではない。アフラクはなおバアスを代表する者として党の内外で大きな影響力をもち，国民指導部を握っていた。この限りで第6回大会を主導した新興勢力は未だ完全に党を支配していなかったといえよう。ところで63年のクーデター当時バアスは3つの勢力に分かれていたといわれる。1つはアフラク・ビタール派，もう1つはクーデターを遂行した軍事委員会派，他は雑多な要素であったが，このうち軍事委員会派は貧しい農村を背景とした若手士官が結集したものとして党の左派を代表し，シリア地方指導部，シリア軍および National Guard と呼ばれる党の軍事組織を押えてもっとも大きな勢力を誇っていた。先の第6回大会はかれらが主導権を握ったものであったが，この大会に先立って行なわれたシリア地方指導部の選出においても左派は優勢を占め，すでにはっきりとアフラクとビタールの改良主義的性格を批判し，党からの追放を求めるようになっていたことに注意しなければならない。もっともクーデター後のシリアの政権はビタ

33 この点については，林 武『現代アラブの政治と社会』アジア経済研究所，1974年の第2章において詳細に検討されている。

34 Itamar Rabinovich, *op. cit.*, p. 156.

35 *Ibid.*, p. 149.

ールにまかされており，第6回大会の後でさえもその後の国有化にたいする実業界の反撥や経済悪化による政情不安をなだめるためにビタールを中心とする穏健派内閣がすえられ，こうした政情を利用して64年2月の第7回党大会では左派が追放され，シリア地方指導部はアフラク・ビタール派に握られて，事実上第6回大会の決議が否定されるという状態すら生じている。しかし64年末シリアで政状が安定すると再び軍事委員会派がシリア指導部を支配し，その後も支配を維持して第6回大会の決議を復活させていることから明らかなように，アフラク・ビタール派はバアスの危機に際して一時利用されたにすぎず，結局1966年2月には完全に党から追放されてしまった。こうして「個人的で精神的なルネッサンス」であったアフラクのバアスは「経済的現実と政府の責任という灼熱の光の中で必然的に死なねばならなかった[36]」といえよう。そしてその後はシリア民族主義に基礎を置き，急進的な経済・社会政策をかかげる新バアス主義がシリアで定着することになった。

ところでこの新バアス主義はシリア民族主義と社会主義とによって特徴づけられるもののなお若干の特徴をもっていることを指摘しておかなければならない。その1つは新たなバアス政権はこれまでの文民統治を指向した政権にたいして明らかに軍事政権としての性格を強くもっていることである。それは独立以降のシリアの歴史において現実に政権をかえてきたのが軍のクーデターであり，とりわけ63年のクーデター以降バアスを政権にすえた軍の力はアフラクにとっても，国民にとっても無視できなくなっていたことから明らかであろう。

もう1つはこの軍事政権の内部に相当深刻な派閥対立が含まれていることである。これは軍事委員会がシリアでクーデターをおこした時からすで

36 Donald Lawrence Betz, *Confilict of Principle and Policy : A Case Study of the Arab Baath Socialst Party in Power in Syria 8 March 1953～23 February 1966*, doctoral thesis, University of Denver, 1973, p. 445.

にその支配をめぐって生じていたといえるものであるが，64年末軍事委員会がシリア指導部を支配した時明確な形をとるようになり，まず副首相，防衛相，内務相，軍政副長官として実権を握っていた A. ハーフェズと陸軍少将 M. ウムランの対立となって表面化し，65年にはこのハーフェズと参謀長官 S. ジャディードの対立となって現われた。特に後者の対立ではスンニーのハーフェズとアラウィのジャディードという対立の形をとり，結局アフラク・ビタール派に支持を求めたハーフェズが66年のクーデターによってアフラク等と共に追放されることになったが，その後もバアスでは内部分裂がつづき，今度はジャディードに対して同じアラウィの H. アサドが対立し，69年にはアサドが無血クーデターをおこし，以後一応安定した形で現在にいたっている。その際注意すべきはこうした派閥争いは「政治路戦問題，原則問題であるよりは少数宗派問題の噴出」[37]，あるいは個人的対立であるともいえ，したがってこのことが現在の新バアス主義を明確に定義づけることを妨げる大きな要因となっていることであろう。いずれにせよ66年以降とりわけアサド政権下のバアスは一層の資料と再検討が必要であることはいうまでもない。

〔付記〕

ところでバアスはシリアに於てのみ政権を握ったわけではない。先にふれたようにバアスはイラクに於ても1963年に政権を握った。しかしこのクーデターは単独でなされたものではなく親ナセル派で軍を代表する S. アレフとの協力で行なわれ，しかもイラク・バアス党は内部で社会主義をとなえるいわゆる強行派と党の原則を守る穏健派とにすぐ分裂した。ところがこうした党内部の派閥争いとそれに伴うイラクの政治的混乱にたいしてアフラクは党の最高指導者という立場をたてまえにイラクに干渉し，民族的感情の強いアレフを初めとするイラク軍部のクーデターをひきおこし，

37 林 武，前掲書，143ページ。

政権を握ってから9ヶ月で自ら政権を手放すきっかけを作ってしまった。アレフ政権はその後社会主義法令を出してナセルと同じ道を歩みはじめたが，5年後の68年にバアス穏健派の H. バクルによるクーデターによってとってかわられ現在にいたっている。このバアス政権の下で急進的な農業改革や国有化が行なわれて「大きな変化が生活の種々の面でおこった」[38]といわれているが，イラクに関しては稿を新たにして検討する必要があろう。というのはイラクはシリア以上に人種，宗教が大きくわかれていること，そして夫々の人種，宗教内でも部族意識が強く，民族国家としてのまとまりを欠いていることが指摘され，これがイラクのバアスのあり方を規定しているものと考えられるからである。また68年以降のイラクのバアス政権は同じバアスを名のりながらシリアのバアス政権とは犬猿の仲にあり，夫々の民族主義が強烈にうちだされ，その独自性が主張されていることも指摘しておかねばならない。

38 Tareq Y. Ismael, *The Arab Left*, New York, 1976, p. 44.